

# 28 祇園祭 祭礼篇

ぎおんまつり さいれいへん

## 知る

どんな祭？

祇園祭とは、八坂神社の祭礼であり、この祭礼に合わせて中京・下京区の山鉾町等では諸行事が行われます。葵祭・時代祭と合わせて京都三大祭と呼ばれ、また、大阪の天神祭・



「洛中洛外図屏風」上杉本陶版(京都アスニー)

東京の神田祭と並んで日本三大祭の一つに数えられています。祭礼の期間は、ほぼ一カ月間で、七月一日の吉符入りから神事が始まります。その夜からお囃子の練習が行われ、二日には、京都市議会の議場に

おいて、市長立ち会いのもと、山鉾巡行の順番を決める鬮取り式が行われます。七月十日には神輿洗が行われ、同日から鉾建てが始まります。鉾は数日かけて完成しますが、山は一日で組み上がるため、山建ては十三日より行われます。

十六日の宵山、十七日の山鉾巡行(四条烏丸 四条通 河原町通 御池通)は、全国的に有名で、たくさんの人で賑わい、新町御池で巡行が終わると、山鉾は各山鉾町に戻りすぐさま解体されます。その後、二十四日には花傘巡行、二十九日の神事済奉告祭で、祭礼は終わりをむかえるのです。

### 祇園御霊会

祇園祭は、疫神怨霊を鎮める祭礼である御霊会が起源で、もとは祇園御霊会・祇園会と称し、貞観十一(八六九)年、全国的に疫病が流行した時、その退散を祈願して長さ二丈程の矛を、日本六十六カ国の数にちなみ六十六本を立て、牛頭天王を祀ったのが始まりといわれています。

天禄元(九七〇)年以後、祇園御霊会は、毎年の行事となり、六月七日に神輿を迎えて種々の神事を行った後、十四日にこれを送るのを定例とし、その神事には朝廷や院から馬長や田楽・獅子などが上納され、見物者の目を楽しませました。

また、庶民からも色々な芸能の奉納があり、長保元(九九九)年、雑芸者無骨が大嘗祭の標山に似た作山を作って行列に加ったのが、現在の山鉾巡行の原初とされています。

山鉾の時代

平安末期には祭礼が一段と賑やかになり、鎌倉時代になると、鉾や長刀に装飾を付けたものが行列に加わりました。現在、栗田神社(東山区)の大祭などで見られる剣鉾巡行に当時の様子をつかがうことができます。

三條公忠の日記『後愚昧記』に記された永和二(一二七六)年の祇園会では、神事を勤めなかつたにもかかわらず、鉾は例年通り巡行が行われており、これは、祭礼への関心が、神輿渡御などの神事から山鉾巡行に移ってきたことを意味しています。また、当時の山鉾は、すでに一人で担ぐ剣鉾のような小型のものではなく、かなり大型化していたものと思われ、「高大鉾」が倒れ、老尼が圧死する事件も起きています。

一条兼良の『尺素往来』には、定鉾以外に鵲鉾・跳鉾・白河鉾の名が見られ、合わせて笠車、風流の造山、八撥の曲舞が奉納されたとあります。この後も、山鉾の数は年ごとに増え、十五世紀中頃には五十八基に達しましたが、応仁・文明の乱(一四六七～七七)で巡行は中絶します。

町衆と山鉾

乱後三十三年を経た明応九(一五〇〇)年、山鉾は再興され、『祇園社記』には、六月七日に二十六基、十四日に十基が巡行したとの記載があります。

祭礼は、安土桃山期から江戸初期にかけてより盛大となり、その様子は「祇園祭礼図屏風」や「洛中洛外図屏風」などで見ることができます。また、この時期、京都の町組の整備によって、祇園社氏子区域の中に、山鉾町とその寄町(地ノ口米を負担してその経費の一部を助ける組織)が定まりました。江戸時代には、祇園の芸妓による風流行列などの練り物が

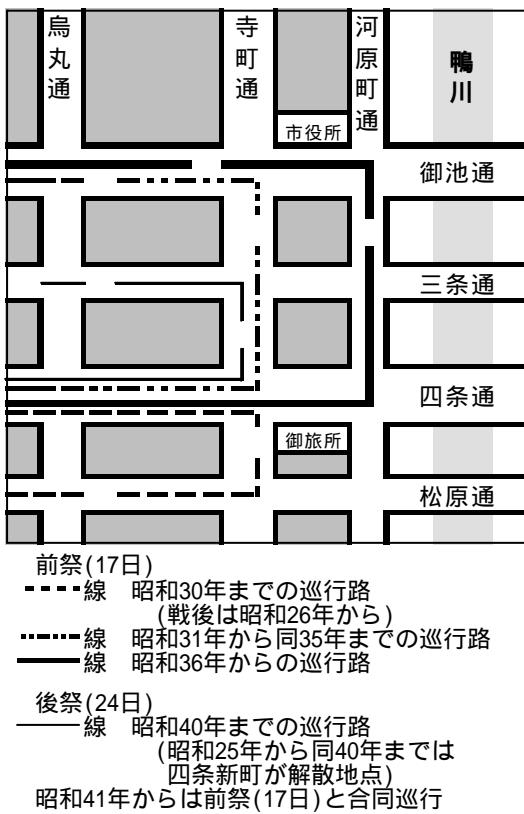
年々華やかさをきわめ、宝永・天明・元治の大火による被害もありましたが、ほとんどの山鉾はそのつど復興しました。明治維新後、太陽暦の採用に伴い、明治十(一八七七)年には、巡行日が七月十七日(前祭)と二十四日(後祭)に改められました。

明治以後の変遷

明治五(一八七二)年の寄町制度の廃止にともない、財政面において、山鉾の維持と存続が危ぶまれるようになりました。そのため、明治八年、山鉾巡行や神輿渡御の経費を援助する協賛組織として清々講社が結成され、各山鉾町でも、大正十二(一九二二)年、現在の山鉾連合会の前身である山鉾町連合会を組織し、以後、これらの組織に支えられ昭和十七(一九四二)年まで、山鉾の維持と巡行が行われてきました。

昭和十八年、戦争により山鉾巡行は中止となりますが、同二十二年には長刀鉾と月鉾が建てられ、長刀鉾のみが巡行を

山鉾巡行コースの変遷



行いました。二十九基（綾傘鉾、蟠螂山、四条傘鉾以外）の山鉾が復活し、巡行に姿を見せたのは同二十七年のことです。昭和三十一年には松原通から御池通へ、同三十六年には寺町通から河原町通へ巡行コースを変更、同四十一年からは先祭と後祭の合同巡行（十七日）となり、後祭に代わる行事として、花傘巡行（二十四日）が行われようになりました。

### 祭礼時以外に行われた山鉾巡行

祇園祭は暑いさなかに行われるため、明治時代にはよく流行病によって巡行の延期が度々ありました。

明治十二（一八七九）年の巡行は、町中にコレラが流行したため十一月七日（前祭）と十三日（後祭）に延期しています。

この年たまたまドイツ皇帝ウイルヘルム一世の孫にあたるハインリッヒ王子が来京していたため、同月十五日には全山鉾が京都御苑内に参入し、翌日、建礼門前に整列するという史上まれに見る出来事がありました。

また、明治二十三（一八九〇）年四月八日の疏水竣工式の祝宴には、会場に月鉾・鶏鉾・郭巨山・油天神山が建てられ、祇園囃子が演奏されました。

## 歩く／見る

### 八坂神社 東山区祇園町

八坂神社の創建は、一説によると、高麗よりの調進使伊利しが八坂郷に牛頭天王の神祠を建てたことに始まるとされ、その頃は、祇園社あるいは祇園感神院と呼ばれていました。

八坂神社の社名は慶応四（一八六八）年三月の神仏分離令に

より、「感神院祇園社」を「八坂神社」としたことによります。この時、祭神名も仏教的な牛頭天王・婆利采女・八王子から神道の素戔嗚尊・櫛稻田姫・八柱御子命に改められました。

### 吉符入り

吉符入りとは、神事始めの意で、各山鉾町（船鉾町は三日・長刀鉾町は五日）では、それぞれの町会所に八坂大神の神位を勧請し、その年の祭の行司以下役員を選定を行うほか、山鉾の組み立てや曳行に当たる大工手伝い並びに車方の人びとと契約書の調印を行います。

この日、山鉾各町からの招きを受けた八坂神社の神職が、その会所に向き、お祓いを行います。行司その他所役の当番たちは会式終了後、うち揃って神社に参詣し、社前で拜礼を行い、御神酒を頂戴して、神事の無事を祈ります。

### 神輿洗

神輿洗は、七月十日と二十八日の夜に、神輿三基のうち主神を祀る中御座の神輿を四条大橋まで運び、鴨川で浄める行事です。



八坂神社 西楼門

八坂神社南楼門 四条通 四條大橋のコースで、神輿は橋上の中央北側に据えられます。早朝汲んだ鴨川の水の入った神水桶三個が運ばれ、祝詞が終ると、神職が大麻を桶につけて、一振り毎に神水を神輿に注ぎます。担ぎ手の若衆もこの水を身体に受けて身を浄め、再び神社に帰ります。

なお、神輿出御を出迎えるために提灯行列が行われます。これはお迎え提灯と呼ばれ、行列は、お先太鼓を先頭に、提灯や祇園囃子、児武者、獅子舞、小町踊、子供鷺舞などが、八坂神社から市役所、四条御旅所を経て、神社に帰る行程を練り歩き、市役所と神社に踊りを奉納します。

#### 四条御旅所 四条寺町南側

山鉾巡行に眼を奪われがちですが祭礼の本質は神幸祭と還幸祭にあり、十七日の山鉾巡行と二十四日の花笠巡行は神幸祭と還幸祭の先触れとして行われるものです。

神幸祭とは、普段八坂神社の本殿に祀られている神霊を三基の神輿に遷して御旅所に迎える神事のこと、十七日の山鉾巡行終了後に行われます。

八坂神社本殿に稚児などが昇殿して神事が行われ、その後、宮本講社の人々が神宝を預かり、御旅所に向かいます。神輿三基は十五日から拝殿に安置され、神輿会のかき手が担いで、拝殿回し・さし回しの後、二輪の台車に載せられ、各々のコースを渡御して御旅所に進みます。神職による着輿祭があり、神輿は所定の位置に置かれます。



現御旅所は四条通南側にあり、向かって右の西御殿に中御座(素戔鳴尊)と東御座(櫛稲田姫)。反対側の東御殿に西御座(八柱御子命)が並べられ、灯明・神饌が供えられます。神輿は、その後一週間御旅所に留ま

り、花笠巡行後に行われる還幸祭で本社に帰ります。

#### 旧御旅所

現御旅所は、天正十九(一五九一)年、豊臣秀吉が移したもので、旧御旅所は冷泉東洞院の少将井御旅所と高辻烏丸の大政所御旅所(現下京区烏丸高辻上る大政所町)の二カ所にあつて、祭礼時に神輿は両所に分駐しました。少将井御旅所は町名(中京区)のみを今に残しており、大政所御旅所は故地を示す小祠が建っています。

円融天皇のころ、この地に住んでいた秦助正が夢中に神託を受け、その邸内に御旅所を造つたのに始まると伝えられています。今でも神輿還御の時に、特に神輿を降ろし、神職がその前に玉串を奉納します。

#### 宵山

宵山は、十七日の山鉾巡行の前夜である十六日のことをいいますが、近年は人出の集中を分散させるため、十四日(宵々々山)・十五日(宵々山)も宵山と同じような催しが行われています。

各山鉾町では、駒形提灯に灯がとまり、鉾の上から祇園囃子が流れ、また、町会所には、山鉾の人形・織物・装飾金具などが美しく飾られ、最も祭らしい風情が感じられます。

町会所以外の一般町家でも、この夜は表の格子をはずし、店から奥座敷までの間、障子襖類を取り払って、涼しげな御簾をかけます。床には、毛氈などを敷きつめた上に、秘蔵の屏風をひるげ、宵山見物の人びとの目を喜ばせています。

会所や町家で見られる屏風には、円山派・四条派など名だたる京絵師たちの大作が多く、屏風祭とも呼ばれています。